

令和元年6月18日現在

機関番号：15501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12827

研究課題名（和文）国際美術展の企画テーマと出品作品に基づく「現代美術主題分類システム」の構築

研究課題名（英文）Subject Classification for Contemporary Art

研究代表者

藤川 哲（Fujikawa, Satoshi）

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：50346540

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトは、現代美術の主題分類システムの構築を目指した。近代主義の芸術では、形式上の革新が主眼とされ、主題は二次と考えられてきたが、ポスト近代主義的な実践が増加するにつれて、現代美術の研究における主題分析が必須課題となってきた。本研究では、国際美術展図録の作品解説から「主題語」を選出し、国立国会図書館件名標目表（NDLSH）と米国議会図書館件名標目表（LCSH）のIDに関連づけを行った。これらの主題語の収集と蓄積は今後も継続的に行われる。成果の一部は、ウェブ上で公開している（<http://scfca.hmt.yamaguchi-u.ac.jp>）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、国際美術展図録の作品解説に記述される作品のテーマ、意味、内容、作者の意図、制作動機等を「主題語」として捉え、出典と共に蓄積した。これにより、現代美術における主題の広がりや、新たな主題の探究等を跡づけることが可能になる点に、学術的意義がある。また、現代美術は感じるままに楽しめば良いという説明は、モダン・アートと呼ばれる20世紀中頃の抽象絵画や抽象彫刻には当てはまるが、1980年代以降の様々な芸術実践には当てはまらない。本研究が構築した主題分類システムは、そうした新しい時代の現代美術を主題ごとに関連づけ、どのような内容がいかに表現されているかを理解する手助けとなる点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to construct a subject classification system for contemporary arts. Contemporary visual arts are generally classified by its medium: painting, sculpture, photography, video, installation, and so on. In the modernism art, formal experiment is a main concern and the subject is presumed as a secondary matter. But with the flourishing of post-modern practices, research on contemporary art gradually needs its subject analysis. Through this project, researcher picked up the subject-keywords from the catalogue of the international contemporary art exhibitions. And these keywords are linked to NDLSH: National Diet Library Subject Headings of Japan, and LCSH: Library of Congress Subject Headings of US. The keywords are continuously on the way of collection and accumulation. A part of this accomplishment is open to public on the website: <<http://scfca.hmt.yamaguchi-u.ac.jp>>.

研究分野：美術史

キーワード：現代美術の主題 国際美術展 主題分類

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近・現代の美術においては、絵画、彫刻、写真、映像、インスタレーションなど、表現手段による分類が一般化している。こうした分類の背景には美術における近代主義がある。美術における近代主義は、絵画なら平面性、彫刻なら量塊性など、それぞれのジャンルの固有性を追究する、また建築では装飾を極力排除してジャンルの純粋性を追究する、という考え方である。こうした近代主義の芸術観のもとでは、形式上の革新や表現上の工夫に主眼が置かれ、主題は二の次と考えられてきた。だが、地域社会の課題に向き合ったり、近代主義の歴史観そのものを再考するような、ポスト近代主義的な芸術実践が増加するにつれて、現代美術の研究における主題分析は必須の課題となってきた。

美術における主題分類法・記述法としては、1950年代に発表された ICONCLASS があり、欧米を中心に活用されている。だが、聖書やギリシア・ローマ神話など西洋美術の主題を対象としたもので、グローバルな現代美術の実践を分析するには新たな主題分類システムの構築が必要であると考えられた。特に日本においては、アジア圏の現代美術を紹介する福岡アジア美術トリエンナーレ、エイブル・アートや生け花、陶芸など、多様なジャンルを包摂している神戸ビエンナーレ、里海とともに暮らす人々の生活を背景とした現代美術の実践の場となっている瀬戸内国際芸術祭など、ポスト近代の観点において先端的で特色のある事例が多い。これらの展覧会・芸術祭の出品作品を中心に、主題分析を行うことによって新たな分類システムの構築を目指した。

### 2. 研究の目的

本研究では、福岡アジア美術トリエンナーレ、神戸ビエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭の3つの展覧会・芸術祭の出品作品を中心に主題分析を行うことでポスト近代主義的な現代美術を対象とした主題分類システムの構築を目指した。主題分類システムの構築にあたっては、図書分類の方法であるデューイ十進分類法や日本十進分類法を参照して10類×10綱×10目の1,000分類の項目の設定することとした。だが、研究を進めていくうちに、十進分類法が主題とジャンルを組み合わせた体系になっていることから、目指す分類システムの理想像との大きな齟齬が意識され、また主題語の統制を行う必要性も認識されて、最終的には、日・英バイリンガルで記載されている福岡アジア美術トリエンナーレの図録に掲載されている作品解説から、作品のテーマ、モチーフ、意味、内容、作者の意図、制作動機などを「主題語」として抽出し、国立国会図書館件名標目表 (NDLSH) と米国議会図書館件名標目表 (LCSH) と関連づけて蓄積することで、主題分類システムの構築を目指すやり方に方針転換した。

本研究が目指す主題分類システムの理想像は、体系に整合性があり、追加や修正が容易で、将来、新たに誕生する主題をも組み込むことができる、一貫性と可変性を併せ持つものであった。この点で、池田清彦『分類という思想』(新潮社、1992年)の「人工物はそれ自体が人間の都合による産物なので、これを対象とする分類は、決して科学的な分類となることはない」(p.215)という指摘は根元的であり、また、1978年にワシントンのナショナル・ギャラリーで開催された展覧会の図録『American Art at Mid-century: Subjects of Artist (世紀半ばのアメリカ美術 美術家の主題)』のように、抽象表現主義絵画における「作家たちの主題」(作品の主題ではなく)を論じるような慣行にも、現代美術の主題として対応可能な分類システムを目指す必要があった。こうした観点から、作品を「第1水準」と呼ぶならば、「第2水準」と位置づけられる作品解説を分析対象とし、閉じたシステムではなく、開かれたシステムとして、事例の収集と蓄積作業を継続する形に転換することが最適解と考えられた。このような蓄積型システムの有用性は、『オックスフォード英語辞典 (OED)』や『日本国語大辞典』(小学館)のように、初出と派生的な広がり確認可能となる点にある。そして、事例の蓄積が一定数に達し、初出と派生的な広がり確認できるようになれば、自ずと現代美術における主題の変遷史や発展史を描き出すことが可能となる。

### 3. 研究の方法

国際美術展の図録に掲載されている作品解説のテキスト(日・英)を典拠として、「主題語」を抽出した。「主題語」は、作品の主題を端的に表す1語の名詞、または2、3語程度の名詞を連結したものである。国立国会図書館件名標目表 (NDLSH) や米国議会図書館件名標目表 (LCSH) を参照して、既存のものは NDLSH や LCSH の語彙を採用し (NDLSH の多くの主題語がすでに LCSH に関連づけられている)、類語や関連語については、山口翼編『日本語ソーラス 第2版』(大修館書店、2016年)や『和英辞典』等を参照して、なるべく既存の主題語に置き換えるよう努めた。それでも適切な主題語が見当たらない場合は、新設することとし、その場合も、NDLSH や LCSH の表記法に準拠した。これらは作成順に通し番号や作成日を記載した B6 サイズのカードと、エクセルによる一覧の両方を作成して、アナログ、デジタル両方で検索・参照できるようにした。各カードには、作品名、作者名、出品展覧会名、NDLSH と LCSH の ID を記し、典拠となる作品解説テキストの該当箇所を引用した。

こうした作業に着手する準備段階として、初年度には『新潮 世界美術辞典』の見出し全16,965項目をエクセルファイルに入力し、項目解説の内容を一つ一つ吟味した上で、主題や

画題として明示的に記述されているものを中心に 448 項目を抽出した(発表論文 2)。さらに、事例の多いものから、1)キリスト教美術、2)仏教美術、3)中国画、4)やまと絵・漢画、5)古代ギリシア、6)古代ローマ以降の西洋美術、7)エジプト・西アジア・インド・カンボジア・朝鮮・メキシコ、8)世界各地の美術に共通するもの、9)神話・聖典・叙事詩・図像書、の 9 つに分類して、各グループと全体についてそれぞれの特性を考察した。これらは、近代以前の美術(ただし、非西洋圏の美術を含む)を対象とした項目解説であるが、グローバルな現代美術の主題語のあり方を考える上で、その後の研究の方向性を検討する点で有益な予備調査となった。つまり、宗教美術や故事、説話等、文字による典拠のある視覚芸術について、「主題」が特定されている例が多いことが判明したからである。また、アート・ドキュメンテーション学会に入会し、年次大会や見学会に参加して知見を広げたほか、同会の研究誌『アート・ドキュメンテーション研究』巻末の「アート・ドキュメンテーション関連文献目録」より「分類及び主題分析・シソーラス」のグループにリスト化されているものを中心に文献収集を行い、十進分類法の問題点、分類法の変遷史や最新動向について理解を深めた。

同会会員で跡見学園女子大学の福田博同教授には、さまざまな形で励ましやご助言を頂いたほか、同教授が長年蓄積されてきた「日本絵画シソーラス」のデータを Google Drive 経由でご開示頂き、大いに勉強させて頂いた。ここに記して厚く御礼申し上げます。

次年度には、「主題」を論じた美術論の歴史の変遷について研究し、近代とポスト近代において、主題に対する考え方が大きく変化していることを明らかにした(発表論文 1)。また、同年度の成果で、翌 2017 年度に刊行された論文集では、近代主義芸術の理論的指導者であったクレメント・グリーンバーグの美術批評を検討して、近代主義において「主題」よりもジャンル毎の純粋性が重視されるようになった経緯を明らかにした(図書 1)。2017 年度は、さらに『American Art at Mid-century: Subjects of Artist (世紀半ばのアメリカ美術

美術家の主題)』を精読して、グリーンバーグが後押しした抽象表現主義に括られる画家・彫刻家たちにとっての主題について理解を深めた。

諸事情により研究期間を 1 年延長したが、2018 年に開催されたシドニー・ビエンナーレと光州ビエンナーレの図録からも有意義な示唆を得ることができた。前者では、総合監督の片岡真実氏が 6 つのテーマを設定し、1 つの作品について複数のテーマがオーバーラップしている、という考え方を、円形に配した 6 つのテーマが互いに線で結ばれる図式としてまとめていて説得力があった。また、光州ビエンナーレの図録は、作家自身の言葉による作品解説を掲載しており、作品の主題のみならず、モチーフやテーマ、制作意図などを読み取ることができた。

#### 4. 研究成果

視覚美術の主題分析は、分析者の解釈に委ねられる要素が大きく、一義的に決定することができない。その代わりに、展覧会図録に掲載された作品解説は、そうした作品解釈がある特定の時点である特定の筆者または作者によって生み出された、という歴史的事実の存在証明と捉えることができる。また、そうした作品解説には、「作品の主題」という表現で明示的に論じられないながらも、作品のテーマ、モチーフ、意味、内容、作者の意図、制作動機といった文脈で言及されることが多い。こうした「主題」に類する要素の解説から、すでに図書分類法として長い歴史を持つ、国立国会図書館件名標目表(NDLSh)や米国議会図書館件名標目表(LCSH)の表記法を参照して、1 語の名詞、または 2、3 語程度の名詞を連結した主題語として蓄積することには、意義があると言える。

本研究によって、NDLSH や LCSH が立項しておらず、現代美術の主題語として新たに定義する必要のある事例を多数確認することができた。例を挙げれば、消えゆく伝統、経済危機、故郷、消費主義、廃棄自動車、落花などである。これらの主題語のリストは、山口大学が運用するサーバー上で公開されている(<http://scfca.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/>)。研究代表者は、今後も国際美術展を継続的に調査するので、さらに事例を追加してシステムの拡充を行う予定である。また、本研究によって、「美術における主題とは何か。その成立と変遷はどのようなものか」という新たな研究課題が浮かび上がった。これは非常に大きな問題設定であるが、例えば、18 世紀に活躍した画商ジェルサン(1696-1750)が作成した作品目録は、作品の主題や特徴を記述しており、美術史的な思考の萌芽の 1 つであるという指摘もある(大野芳材「美術館の時代」、『世界美術大全集 西洋編 第 19 巻 新古典主義と革命期美術』(小学館, 1993 年, p.332)。現代美術の主題に関する事例の蓄積と並行して探究していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

1. 藤川哲「近代とポスト近代の美術理論における「主題」 Ch. ハリソン& P. ウッド編『理論にみる美術 1900 -2000』による」、『山口大学哲学研究』第 24 巻(2017 年 3 月 23 日)、23-51 頁、査読無し。
2. 藤川哲「『新潮 世界美術辞典』の項目見出しを基にした主題語の抽出と分析」、『山口大学 文学会志』第 66 巻(2016 年 3 月 28 日)、101-120 頁、査読無し。

[学会発表](計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

1. (論文集の1章分)藤川哲「クレメント・グリーンバーグの美術批評における物語と時間文学的效果に対する否定と無限の多様性をもった1つの響き」、時間学の構築編集委員会編『物語と時間』(恒星社厚生閣、2017年6月30日)、59-90頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

現代美術主題分類システムの構築に向けて<<http://scfca.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/>>

## 6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。